



Contents

特集 外部アセスメント・テストを通して、 学生の学修成果を可視化

連載 部科校における学習支援等の事例紹介

第15回 [芸術学部] ハラスメントに関するFDセミナーを実施

連載 授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供

第16回 [通信教育部] 通信教育ならではの強みを生かした授業を展開

COVER PHOTO

合成した医薬品の有効成分を抽出している様子。「創薬化学系実習」では、有機化合物の合成、天然物中の有用成分の解析、医薬品の分析などの実験を通して、医薬品の合成や品質管理に関する知識を深める教育を行っています。(担当教員：薬学部 張替直輝教授)

2

4

特集 外部アセスメント・テストを通して、 学生の学修成果を可視化

本学では令和5年度から、学生の学修成果の測定及び把握を目的として、全学部の学生を対象に外部アセスメント・テストを導入しました。これまでの授業改善が学生の学修成果につながっているかを確認するだけでなく、今後の学生への指導や更なる教育改善など好循環のサイクルにつながることを期待しています。

外部アセスメント・テストとは？

このアセスメント・テストは、これからの時代に必要な「問題解決能力=ジェネリックスキル（汎用的能力）」の構成概念を「思考力」、「姿勢・態度」及び「経験」と定義し、それらの定義において、学生の学修成果を多面的に測定します。これまで本学では、学生の成績状況、授業評価アンケートの結果、学修満足度向上調査などのさまざまな結果を測定・評価して教育改善につなげていましたが、学生の思考力の客観的な評価、また学修成果・教育成果の的確な把握や可視化を十分に行えていないことが課題でもあったため、その点についても確認していこうと、アセスメント・テストの導入に至りました。

実施期間：令和5年4月1日～6月30日
対象者：学部及び短期大学部に在学する正規学生
使用アセスメント・テスト：GPS-Academic
 (株式会社ベネッセi-キャリア)

■アセスメント・テストの概要 (オンラインテスト方式)

「思考力」

「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の3つの測定項目からの出題を通じて、問題解決の質と深さを左右する「思考力」を測定します。

「姿勢・態度」

「レジリエンス」「リーダーシップ」「コラボレーション」という3つの観点で評価します。問題解決へ向かう姿勢・態度を通じて学生の強みやタイプを可視化します。

「経験」

「自己管理」「対人関係」「計画・実行」という3つの観点で、現時点でどの程度問題解決の「経験」を積むことができているかを主観評価で数値化します。

■アセスメント・テストの測定項目

客観評価	問題解決の質と深さを左右する 「思考力」	批判的思考力 協働的思考力 創造的思考力	<ul style="list-style-type: none"> 情報を抽出し吟味する 論理的に組み立てて表現する 他者との共通点・違いを理解する 社会に参画し人と関わる 情報を関連づける・類推する 問題をみだし解決策を生み出す
	問題解決に向かう 「姿勢・態度」	レジリエンス リーダーシップ コラボレーション	<ul style="list-style-type: none"> 感情の制御 立ち直りの速さ 状況に応じ冷静に対応する 自ら先頭に立って進める 未知の物に挑戦する 粘り強くやり抜く 相手の立場に立とうとする 他者と関わろうとする積極性
	問題解決の力を磨くための 「経験」	自己管理 対人関係 計画・実行	<ul style="list-style-type: none"> 挑戦する経験 続ける経験 ストレスに対処する経験 多様性を受容する経験 関係性を築く経験 議論する経験 課題を設定する経験 解決策を立案する経験 実行・検証する経験
主観評価			

アセスメント・テストを受検した学生の声



津田晴佳
危機管理学部
危機管理学科 3年

●受検した感想

設問数が多く動画や音声などの設問もあるため、問題をすべて解き終わるまでに長い時間がかかると感じ、ためらいはあった。設問は考えさせられるものが多かったが、面白いものが多く楽しむことができた。

●テスト結果を受けて気づいたことは？

自分の能力について客観的に知ることができた。私は1年次にも受検しているが、当時の判定と比較することもでき、どの程度成長しているかを知ることができた。反対に自分が思っていない能力の点数が高く驚いた。

●受検の結果は今後の学びに生かせそうか？

足りない能力やその能力の伸ばし方について具体的なアドバイスをされるので、今後の学修の参考になった。日々の授業のグループワークやゼミの話し合いなどの場で積極的に取り組み、能力を伸ばしていきたいと思った。

全学部の受検結果を共有・分析し、教学DX推進を加速

教学推進オフィスは、令和5年9月22日に「外部アセスメント・テスト（GPS-Academic）を活用した分析報告会」を実施しました。今回は全学実施の初年度のため、令和5年度入学者の結果を中心に報告しました。今後4年間、同テストを全学部・全学年で実施する予定であり、学生の成長を継続的に観察・分析することの必要性が共有されました。

講演1

外部アセスメント・テストの結果から見た、 日本大学学生の問題解決能力の特徴

株式会社ベネッセi-キャリア
大社接続事業本部東日本CS課 課長 高橋広平氏

講演の前半は、学生の問題解決能力に関する各項目のスコアにおける学部間比較や、全国平均値との比較の結果が紹介されました。本学の1年生は、全国平均値と比較して「姿勢・態度」のうち「リーダーシップ」に強みがある学部が多数あることが報告されました。後半は、学生の意識に関する調査結果を共有。自習時間や成長実感、カリキュラム満足度などの結果から、学部ごとの強みと課題が浮き彫りになりました。高橋氏は、「スコアや意識調査から学生全体の資質・能力や意識の傾向をつかめるだけでなく、優秀な学生や中退の可能性が高い要支援学生の抽出にも活用できる」と提言しました。



特徴的な結果の一例（1年生）

● 「思考力」「姿勢・態度」「経験」いずれも高い医学部

医学部は、「思考力」「姿勢・態度」「経験」いずれのスコアも全国平均値を上回り、全学部の中で上位にありました。薬学部や芸術学部、文理学部は、「思考力」が全国平均値より高い結果でした。

● 「協働的思考力」「対人関係の経験」に優れる芸術学部

「思考力」「リーダーシップ」と問題解決に重要なスコアがバランスよく高かったのが、芸術学部と医学部でした。特に芸術学部は、「協働的思考力」や「対人関係の経験」のスコアが学部間比較で高い結果でした。

講演2

入学者情報などを掛け合わせて分析し、 データ駆動型教育の実現を目指す

教学DX戦略委員会 委員長 理工学部准教授 中村文紀

中村委員長は、「姿勢・態度」「経験」「思考力」の各項目のスコアを学科間で比較した結果を報告。これまで学部ごとの状況把握は行っていましたが、学科間の詳細な分析は今回がはじめてで、学科の特性や入学者の属性によって大きな差

異がみられることが明らかになりました。また、同テストと入学者情報を掛け合わせた分析結果も共有。進路区分別に入学者の「思考力」を分析することによって、学生募集



の対策に生かせることなど、DXの可能性を示しました。最後に中村委員長は、「データ駆動型教育を加速するには、データ提供が必須。今後も協力をお願いしたい」と述べました。

データを活用してミドルレベルの検証を行い、カリキュラム改善につなげたい



FD推進センター 副センター長
生産工学部教授
藤井孝宣

内部質保証に関するPDCAサイクルを強化するためには、学修成果の可視化などミドルレベルの検証が重要です。

特に私が注目しているのは、従来のテストで測ることが難しかった「姿勢・態度」「経験」の測定結果です。PBLの充実な

ど各学部で問題解決能力を高める工夫をしていますが、今回の結果を参考にしてカリキュラム改善につなげる考えです。

今後の課題は、4年間継続して結果を分析していくことと、日本大学教育憲章で示している8つの能力と外部アセスメント・テストの測定項目の関係性を整理することです。本学の授業は、日本大学教育憲章をベースにした各学部のディプロマ・ポリシーに対して設置されています。GPAと同テストの結果の相関を明らかにすることで、各学部で改善すべき点がより明確になると考えています。

連載

部科校における学習支援等の事例紹介

第15回 [芸術学部] ハラスメントに関するFDセミナーを実施

芸術学部では、年2回の頻度でFDセミナーが行われています。筆者は、昨年度の12月に行われたハラスメントに関するセミナーで講師を担当しました。

この回はハラスメントの問題を自分ごととして捉えるということを目的として、どのような時に学生は教員との関係性をハラスメントであると感じるのかということや、そうした状況に陥らないために何ができるのかということについてお話ししました。一般的なハラスメント研修では、ハラスメントの定義を確認し、

事例を提示しながらそれがハラスメントに該当するのか否かということについて説明が行われますが、本セミナーではそうした内容にはふれませんでした。実際のハラスメントの現場では、定義に当てはまらないことや境界線を明確に引くことができないグレーケースの方が多いからです。

本セミナーはハラスメント研修としては一風変わったものであり、内容もハラスメントに関する自己の振り返りを促すようなものだったにもかかわらず、教職員の反応は予想し

ていたよりも好意的でした。ハラスメントの問題を自分ごととして真剣に捉えるコメントが寄せられ、教職員のハラスメントへの関心の高さを窺い知ることができました。

また、ハラスメントという敬遠しがちな問題であっても、本質的な問題の提起や問いかけは真摯に受け止めてもらえるということや、教職員の関心やニーズを反映したFD研修を行うことの重要性を改めて認識しました。

(芸術学部教授 大寺 雅子)

連載

授業改善のための
ティーチングティップスの収集と情報提供

第16回 [通信教育部] 通信教育ならではの強みを生かした授業を展開

通信教育部は専任の教職員スタッフと校舎をもち、通常の通学型授業を開講している点が他の通信制大学とは異なります。この点は学部の日常の姿と同様です。学部にはない点を紹介すると、全国に在住する学生のために各地に学習センターを設置していること、多様な学び方として地方で開講するスクーリングや東京で夏期・冬期あるいは連休期間を利用した集中授業、さらには就労者も受講しやすい時間帯に設定された夜間スクーリングがあることです。メディア授業も全学に先駆けて2004

年から開講しており、現在約90講座を受講することができます。コロナ禍においてもこの受講料金を下げることにより学生の学びを支援してきました。

情報通信技術の活用に関しては2015年の「大垣サテライトスクーリング」で、大垣日大高校の校舎と通信教育部をテレビ会議システムでつないで両講堂に集まった学生を対象に、双方向型遠隔授業がすでに行われていました。情報を配信しても一方型で視聴するだけとなれば効果は低いと考えて、協働的な学びが

できる具体的な活動プログラムを構想していた経験がコロナ禍においても生かされていたと考えています。現在は基本となる通信学修（在宅での自学と試験での単位修得）を主体的な学びとして再定義するために、FD活動としてガイドラインを作成中です。新たな課題となる「労働力モビリティ」「リスクリング」「ダイバーシティ」といった現代的な問題にも貢献できる経験と可能性をもっているのが通信教育部です。

(通信教育部教授 古賀 徹)

※本ニューズレターに記載した資格・学年等は、令和5(2023)年9月現在のものです。

日本大学 FD NEWSLETTER 第23号

発行日: 令和5(2023)年10月1日(年2回発行)

発行 者: 日本大学FD推進センター センター長 河相 安彦

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 電話:03-5275-8314 FAX:03-5275-8315

e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp https://www.nihon-u.ac.jp/fd-center/

所 管 部 署: 日本大学 本部 学務部学務課 企画・編集: 日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

「日本大学 FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら、学務部学務課(adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp)へお寄せください。

本ニューズレターに掲載した文章、写真等の無断転載・複製を禁じます。 Copyright(C)Nihon University 2023 All Rights Reserved.

